The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モニュマンのデザイン : ルーズベルト記念碑のコンペについて
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 79-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52450
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

モニュマンのデザイン

——ルーズベルト記念碑のコンペについて——

向　井　正　也

モニュマン，日本語で記念碑，英語ではモニュメントと呼ぶが，このフランス語のモニュマンというコトバが一番やわらかく，耳ざわりもよいし，語呂もいいので，わが国でもよく使われる。

日本語で記念碑と云ってしまうと，誰しもこのコトバから，すぐさまかっての忠霊塔とか墓石のような形式のものを想像しがちだが，モニュマンとはそんなユーザーのきかないセマイ意味のものではない。

英語には，モニュメントと並んでメモリアル (Memorial) というコトバがあるが，この方がむしろ記念碑に近いイミをになっているようだ。つまり「何々の記念の為に」「誰々の追憶の為に」碑を建てるという，狭いイミアイからは，このコトバがピッタリすると思われる。

モニュマンはもっと広い意味をもつ。それはいろいろの意味で，一般性 (Monumentality) を含んだ，彫刻的なもの，建築的なもの，をすべて包括する。だから，モニュマンには，その中に人間を容れる建物（正しくは記念建造物）も勿論ふくまれている。エジプトのピラミッドなどは死者を容れるモニュマンで，墓石のデカイものだからしばらくおくとして，さしづめローマ皇帝やナポレオンが造った，戦勝記念のガイセン門など，その好例だろう。もっとも，モニュマンとは最初から記念的な意味をもたせて造ったものとばかりは限っていない。長い歳月を風雪に耐えぬいて来た。過去のある時代の遺物としてのモニュマンは，どこの国でも古建築として存在している。時の経過というも

のが，それらの建造物に「記念性」を与える結果となったといえるが，この事は時代や社会の如何を問わず，「記念性」についての最も大切な属性の一つが，「耐久性」（Durability）である事を，われわれに教えてくれる。

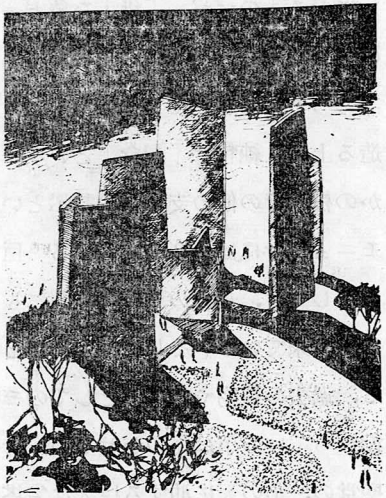
記念性のもう一つの大切な属性は，そのスケールの巨大さ（Large Size）だとよくいわれるが，この方の「耐久性」に較べると必須の要件とはいえないようだ。先日某週間誌に載っていた吉川英治の墓は，「名匠」谷口吉郎のデザインになるものだが，「机」を象どった，黒っぽい石の台座の上に，花筒くらいの可愛いい白い墓石が，しっとりとしたただずまいを見せ，奥ゆかしいかぎりであった。これとても立派なモニュマンである。ただモニュマンには，これを造る上で，純粋な「記念」というファンクション以外に，これをめぐって何らかの権力その他の支配力の誇示という不純な動機がはたらく事がある。そこでモニュマンには第2の属性たる「巨大さ」が要求される。エジプトのピラミッドにしても，パリのガイセン門にしてもみな然り，そのバカデカさはみんなここから来ている。そして一方これとは逆に，上記の後から記念性をカクトクする，過去の遺物や文化財としてのモニュマンについても，この「巨大さ」が一役かっている事は見のがせない。今なおヨーロッパ各地にのこる，ゴシック大聖堂の，あの天に沖する巨大な尖塔がそうである。日本のお城だって決してこの例外であろう筈はない。

前おきが大へん長くなってしまったが，ここで御紹介申しあげるルーズベルトの記念碑は，まさに狭義のモニュマン（メモリアル）である。ただ寸法がかなり超人間的（スーパー・ヒューマン）スケールの案が多かった点，やはりエジプトのピラミッドと軌を一つにするのようにも思われ，そこに何となくアメリカのナショナリズムといったニオイガつよくただよって来る気配が濃厚である。

20世紀のアメリカの巨人，フランクリン・デラノ・ルーズベルトの記念碑の競技設計（コンペ）の全貌がこのほど公開された。敷地はワシントン市，ポトマック河とタイダル池とで囲まれた，西ポトマック公園の一部だがこのあたり一帯は，合

衆国の歴史と伝統にかがやく由しょ深きところで，丁度この敷地の三方を半ば囲むかたちで，東にジェファーソン・メモリアル，西にリンカーン・メモリアルという2つの記念建造物をひかえ，北には巨大なオベリスクの形をした有名なワシントン・モニュメントがそびえている。しかもこの河や池をめぐる美しい桜並木は余りにも有名である。

したがって審査員もアメリカの生えぬきばかり，巨匠P．ベルスキイ（M.I.T），J．ハドナット（ハーバード），若手として近頃売出しのP．ルドルフ（イエール）など建築畑の権威者の他に造園関係や美術関係の専門家が加えられた。第一次審査は1960年9月，6つの優秀作をえらび，同年末さらにつづいて，この中から最優秀作品を一つにしぼった。ペダーソン・ティルニイ建築設計事務所（ニューヨーク市）の案だが，このグループは上記2名の建築家の他に2名協同者と1名の彫刻家，及び2名の構造技術者が含まれている。



図に御覧のように，この案は誰しもまず，あの有史以前の巨石の環列（クロムレック）からヒントを得たことに気がつくだろう。そしてこの種の発想を基本とするものがこのコンペでは他にも数多くあった事は，モニュメンタルなものの追求の上で，この原始的な環状列石の形式が，在来の同じく原始的な形式たる単石体(モノリス)からのヒントにより，洋の東西や時代の如何を問わず，よく用いられた「一本石」式モニュマンに代って新しいモニュマンの形式として登場したという点で注目に価しよう。だが発想のミナモトがそのようであっても，この一等入選案は単なるクロムレックとは決して同列に論ずべきではな

い。そこにはかずかずのすぐれたアイディアや造形的配慮がもりこまれ，まさに20世紀的モダーンの代表的傑作にふさわしいものである。それが佳作その他の同一型の案にくらべて格段に秀れていることはいう迄もない。

単に柱状の石がニョキニョキ立っているのではない。高低さまざまな8個のカマボコ状立体（「版」＝Slab）が車座になって1個の同じようなスラブをとりかこんでいるが，よく見るとこのスラブはあしもとのところで折れクギのように直角に折れまがり，遊歩用プラットフォームを形成する。だがこの水平の部分もすべてが地面にくつついては居らず半ば片持梁（カンティレバー）式にハリ出しになっている。とくに一番巨大なスラブのハリ出しが一番大きい。

スラブそのものの形も単純な矩形でなく，彫刻家の参加により，一つ一つのフォルムにさまざまな変化が与えられている。特にこの高低や大きさの異る群造形の内部と外部の空間構成と個々のフォルムとの関連性を造形的に高度なものにする上で，きわめて微妙な調整が行われたことがよみとれる。こうした点，今日大ダンビラで荒料理をやらかす式のわが国の粗雑な建築デザインのあり方など大いに反省すべきよいお手本だといえよう。

構造は鉄筋コンクリートで，仕上げは寒水石モルタルのビシャン叩き，プラットフォームは白のテラゾー仕上げのようだが，これは一方その版状のフォルムとあいまって，その表面に碑文を刻みやすく，読みやすいものにすると共に，一方では陽をうけて白銀さながらに輝く白いスラブの集群がポトマック河に映ずることによって，故ルーズベルトの高い理想を最も効果的にシムボライズしようとする意図をも含むもののようである。だがこれだけ巨大な壁面を目地なしの均質の一本石に見せようとする，表現的な試みは仕上げの亀裂の点などから考えても，その解決はきわめて困難が予測されよう。

このコンペにとって応募者の誰しもに負わされた，最も重要な課題は2つあった。1つは上にのべたモニュマンの表現やシムボリズムの問題であり，もう一つは，その敷地周辺の特殊な環境全体との調和の問題であった。最優秀賞の

建築家達はこれについて，この新しいモニュマンを今日の造形言語で表現するという点にまず重点をおいたことを認めるとともに，それはワシントン市の景観を「補足する」ための創造上の仕事であった旨のことを強調している。特に上記の3人の偉大な大統領の夫々のモニュマンとの関連に最大の考慮が払われたのは，他の多くの案についてもひとしく云いうる事実である。

このコンペについては，意匠論的にまだまだ問題点がたくさん残されている。特に佳作以下応募作品全体をとおして，この一つのモニュメンタルな課題の追求が実にさまざまなヴァラエティを生み出す事になるのだが，そのヴァラエティの中にどのような共通点——類型が生じたか，或はそうしたもろもろの表現の中にどのような新しい方向が見出せるか，など解明すべき点が多々のこされている。ここでは紙数の関係で，一等入選案についてだけしか語れなかったのは遺憾であった。いずれ他日を期し，稿をあらためて論ずることにしたい。

●Blockx 油絵具
●Newton 製品
●Castell 鉛筆
●Berges 画布
●Ecobra 製図器

〈舶来画材各種〉
〈高級額縁製作〉
●舶来画材カタログ進呈

京都・下京区河原町通五条上ル TEL(35)0875